

創学舎ニユース

No.225

親子の関係(番外編)

浅草の新聞専売所での話を続ける。次は親友のHさん。現役で千葉大工学部に入るが、福祉に興味がわき、中退。再度の受験を志す。彼は、かなり裕福な家の出だが、思う所あって親の援助を断る。自分のわがままに対する責任は自分でとるといふ姿勢は一貫していた。私のように、心のどこかで「親に金があったら…」と考えている人間とは違った。自分の力で道を拓くことを、彼は教えた。

他のメンバーの思い出も書き尽くせない程あるが、ともかくみんな様々な事情を抱えて集まってきた。貧乏比べでいえば、私は中位かな。家族の絆でいけば、かなり上位。背負った荷物でいけば軽い方。そんなことが、少しずつ分かってくるにつれて、肩肘張っていた部分が徐々にほぐれていった。

また、浅草という街の背景も大きかった。とにかく、小さな工場や個人商店が多かったし、彫師からヤクザ、ホームレス、風俗関係までありとあらゆる種類の人間達がうごめいていた。その中で、直接間接に知り得た様々な人生の断片。そういえば差別について、私がある程度の

リアリティを感じられるようになったのも、浅草の小さな靴製造業の経営者のお陰だった。これだけ直接に色々な情報や現実が次々と入ってくる、いつの間にか自分が経験したイヤナ思いなにかどうでもよくなってきた。私に、私の家族にイヤな思いをさせた人達への「憎しみ」の様な感情もいつか消えていった。これ程世の中を知る(たかが二十歳前の浪人生であつても)ことは、すごいことであつた。

さて、浪人の身ではあつたが、とりあえずは帰省をしようと思つた。またあの貧しい我が家へ、友人をあまり呼びたくなかつた、しかし懐かしいあの家に戻りたくなかつた。そして九州へ。戻つてみるといrownなものが変わつて見えた。人もそうだつた。小言を言つていたおばさんも、母に説教をしたあるおじさんもみんな懐かしがつてくれた。励ましの言葉をかけてくれた。また、友人の家に行つてみると、その父親が市役所の人であつた。医療保護の申請に母が行つた時、ねちねちと小言を言つたあの男であつた。以下次号 (小林)

(高3生へ)挫折したかい?

夏も終わろうとしている。夏休みを迎えるにあつて、固い決意のもと遠大な計画を立てたキミ!まだ燃えているかい?計画は実行できた

かい?成功のイメージはわいてきたかい? さて、四月からスタートした受験勉強もちょうど半分の五ヶ月が経過した。そして、残り五ヶ月。単純に考えれば四月〜八月でやったことをそのまま二倍すれば一年間の勉強量ということになる。それで足りるのか十分なのか、よく考える。そして、九月からの予定をあらためて組み直し、再スタートだ。

こうして原稿を書いていると、キミ達の伏し目がちの顔が目につかぶ。真面目なA君も、要領で生きてきたB君も、純情素朴なCさんも、かなりの人がすでに挫折したようだ。「ザマーみる!」と酷いことはいわれないが、そんなキミ達を、私は割と冷たく見ていられる。まだまだ甘い。本当の挫折の苦しさをなんてこんなもんじやない。何度も何度も襲つて来て、時には立ち直れない程の痛みを人の心に残す。まだまだ甘い。

ところで、何故挫折するか分かるかい?話の根本を言えば、キミ達が受験というハードルを越えようと考え、今までになかつた負荷を自分に課し、一種禁欲的な生活に入つたからに他ならない。目標に向かつて動き出さなければ、そもそも挫折などありえないのだよ。次に挫折をもたらず個々の要因について言えば、キミ達が受験生としては余りに無知(人によっては幼稚)だからだ。情報は驚くほど豊かで、塾・予備校・

問題集と学習の道具には恵まれすぎていえる程なのに、肝腎のことが分かつていない。つまり、勉強のやり方や心のコントロールの仕方、計画のたて方といったことだ。人によっては、幼稚すぎて受験生にすらなれていなかったりもする。こんな状態での挫折は当然。更に人生の鉄則から言えば、夢と挫折は表裏一体で、古今東西数多くの偉人も、受験の先輩も数えきれない程の挫折を経て夢をつかんだのだ。だからキミ達の挫折もこれもまた当然。

だから、だからだ。挫折はしていいんだ。挫折すらできない奴は、何も考えていないか、よっぽど運と能力に恵まれているか(そんな奴はいない)、動き出す勇気のない臆病者のどれかだ。ただし、肝に命じておかなければならないことがある。それは、同じような挫折を永遠にくり返してはならないということだ。挫折するたびにきちんと立ち止まつて、自分の弱点、欠点をしっかりと見つめる作業をしなければならぬ(これを可能とするのが、ほかならぬ勇気であり情熱であり、素直な性格である)。

具体的な例をあげて考えよう。A君は、長い時間をかけ、初めて学習計画をたてた。そして一週間続けた後、中断した。これはいいのか悪いのか?いいんだ。とにかく一週間続いたのだから。初めて計画をたてたんだから。そして、ここで勇気を出す。続かなかつた原因を探す。

計画にムリはなかったか。選んだ問題集が不適切ではなかったか。心にスキはなかったか。そんなことを十分に反省して、また決意し計画を立て直す。今度の計画は前より上手くなっているはずだ。今度は二週間続くかもしれない。それでいいんだ。それしかないんだ。また挫折したら泣けばいい！苦しめばいい！そしてまた計画をたてる。今度は三週間を目指そうじゃないか！

キミ達は、まだ若い。従って、余りにも経験と知恵に乏しい。当然、人間の心の仕組みについては余り知らないはずだ。だからこそのうだが、失敗や挫折は、人の心を強くし、新たな出発への知恵を与えてくれるのだよ。一度骨折した部分は逆に強くなるというが、人の心も同じような性質を持っているのだよ。再度いおう。挫折はしていいんだ。失敗していいんだ。とにかく勇気を持って立ち向かおう。せつかくもらった生命、その生命が秘めた可能性、その可能性を発現させるのはキミの心の強さだけだ。

ただし、一言。先に述べた心の素直さについてだ。(私は特定の宗教団体には所属していないが)この素直さは非常に重要な要素だ。人生の成功(何をもって成功とするかはひとまず置くが)における第一の要因といってもよい。素直でない人は、とにかく判断を誤りがちだ。周

りに適切な助言者がいても、なかなかそれを受け入れられない。仮に受け入れたとしても、勝手なとり方をしてしまう。例えば勉強法や参考書の選択でいえば、(手前味噌だが)創学舎の講師のアドバイスはかなり正確で適切なものだと思う。ある生徒はきちんと受けとめてくれてきちんとする。きちんとやるから手応えもある。手応えがあるから続く。続くから心も安定してくる。一〇〇%確実というのがないのが入試だが、心が安定しているので失敗も少ない。一方しきりにアドバイスを求めるのだが、なかなか自己流から脱却できない生徒もいる。それも明確な方針に基づいていけばまだしも、いきあたりばったり。手を広げすぎたり、特定の科目に片寄ったり、やったりやらなかったり。そう、そこにいるキミのことだー素直になることを妨げている原因は、これまた様々だが、とにかく素直になれることは大事なことなのだよ。受験まであと五ヶ月。勇気・情熱・素直さを合言葉に動きませ。(小林)

九月は最後の出発点だ！

九月は秋風と共にやってくる。受験生にとって秋風は二つのことを今さらのように感じさせるのだ。一つはファイトだ。さあ、オレは、わたしは、

こんどこそやるぞ、という、あの引きしまった気分なのである。と、同時に、この四月から、何をやったというのだろう、これからどれだけできるというのか、ああ、もう問にあわない、といった焦燥感である。

実は、この二つは別のものではない。同じもの表裏二面なのである。一方があつて他方がない、などというのではないのである。だから、キミがファイトに燃えているとき、これを支えているのは外でもない焦燥感であるし、焦燥感をせきたてているものはファイトなのである。だから、あなたが焦燥感にかられているとき、「わたしはファイトに燃えているんだわ」と思つてよろしい。問題なのはその対処の仕方なのである。

九月は台風の日でもある。二十十日の起源は今もつてはつきりしないらしい。ところが、起源はいまいでも台風はやつてくる。いまだすら、天気図を眺めて、ここまで来た、ここまで来た、大きいらしいぞ、いや、小さくなった、などと、とり沙汰され、極端にいえばなすことなく待っているだけだ。ところが、受験はちがつ、向こうがやつてくるのではない。こちらが立ち向かうのである。なに、入学試験なんてものは、受けなくてもかまわないのである。受けるとはあくまでも自分の意志なのである。キミやあなたが、入学試験を受けないぞと宣言す

れば、それで済むのだ。ということをおぼえていけない。受けるのはあくまでもキミの意志なのである。

してみると、入学試験の勉強というものはキミの意志と、それを貫徹する努力なのだ、ということがよくわかる。入学試験の勉強なんて社会人になってからあまり役に立つ勉強ではないが、しかし、この努力は貴い。いふならば、これは文明社会の通過儀礼なのである。そう観念するとニューギニアの人の中には、部落の最も高い木のテッペンから飛び降りる、といった通過儀礼にくらべて、まだ、易しくもあるし、それこそ文化的というものだ。

九月は受験生にとって、最後の出発のときである。いや、十一月から本気になって、合格した浪人もいる。しかし、それはあくまでも例外である。今日まで、四月から、あれをやり、これをやり、計画との挫折の中にあえいできた受験生が、ここで、腰をすえてがんばることが、いや、そう決意することが、合格への最も大きい条件であることを確認しなければならぬ。(柳)

卒業や転校等で創学舎を離れる方にも、ご希望があれば、創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍した教室までご連絡下さい。